

論文番号	1 (第10回研究会 2012.11.24 於青山学院大学)
タイトル	フィクションとノンフィクションに見られる比喩表現についての一考察
著者名(所属)	平山志保香 (恵泉女学園大学 大学院)
連絡先 Eメール	k12cc002@keisen.ac.jp
<p>論文内容</p> <p>(背景および研究目的)</p> <p>比喩表現には様々な種類があり、小説や新聞など普段人々が目にする様々な文章の中に現れている。しかし、その比喩表現がどのくらい用いられているのか、読む者にどのような効果をもたらすのかを概観している研究はまだ少ないようである。</p> <p>そこで本研究は、フィクションとノンフィクションに見られる比喩表現について従来の比喩の捉え方および認知言語学における比喩の捉え方の双方から調査と考察を行い、その違いを明らかにすることを目的としている。</p> <p>(検討方法等)</p> <p>まず資料には、フィクションでは現代のベストセラー小説を2010年度の有隣堂年間ベストセラーズの文庫から9冊、ノンフィクションでは朝日新聞の社説を用いた。そしてこの資料を従来の比喩の捉え方と認知言語学的な比喩の捉え方から概観し、考察を行った。双方の捉え方から調査を行うのは、従来の捉え方では比喩とされない表現が、認知言語学的な捉え方では比喩表現と認められることなど捉えられる表現に違いがあるため、双方から比喩表現を概観することで、より詳細に比喩表現が分析できると考えたためである。従来の比喩の捉え方は中村(1977)、認知言語学的な捉え方は大堀(2002)、鍋島(2011)に拠っている。</p> <p>従来の捉え方による調査は、それぞれの資料より直喩、隠喩、換喩、提喩を収集し、それぞれの比喩表現がどのような効果を持っているのか、本義と喩義の面から分析を行った。</p> <p>認知言語学的な捉え方による調査は、数量を見るのではなく、従来の捉え方では扱われない比喩表現について、用例を集め、分析を行い、その傾向を明らかにした。</p> <p>(結果および考察)</p> <p>従来の比喩の捉え方による調査の結果、小説は換喩、直喩、隠喩、提喩、社説は隠喩、換喩、直喩、提喩の順に多く出現することが明らかになった。小説に換喩が多いのは物語の登場人物の感情を体の一部で表す表現が多いためであり、社説に隠喩が多いのは、短い文章の中で実際の出来事やその当事者を読者に分かりやすく表現するためではないかと考察した。</p> <p>認知言語学的な比喩の捉え方による調査の結果、小説では水などの具体的な概念に感情や記憶、想像などの抽象的な概念を当てはめる場合が多く、社説では位置関係などの具体的な概念に夢や現実といった抽象的な概念を当てはめる場合が多いことがわかった。</p> <p>(結論)</p> <p>従来の比喩の捉え方での調査では、各比喩表現の種類の中で本義と喩義の関係の傾向を見たが、認知言語学的な比喩の捉え方で調査することにより、従来では比喩として認められていなかった表現が調査対象となる上に、抽象的な概念のイメージの広がりを概観することで日本語の表現方法の特徴がより明らかになった。</p>	
<p>参考文献</p> <p>George Lakoff 著池上嘉彦他訳(1993)『認知意味論』紀伊国屋書店</p> <p>楠見孝(2001)「比喩の理解」森敏昭編・著『認知心理学を知る〈2〉おもしろ言語のラボラトリー』153-171</p> <p>鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』くろしお出版</p> <p>中村明(1977)『比喩表現の理論と分析』国立国語研究所報告 57、秀英出版</p> <p>大堀壽夫(2002)『認知言語学』東京大学出版会</p>	